連載 観光まちづくり最前線 No.4 地域を歩くレポート

産業遺産の活用を考える～
富岡製糸場と絹産業遺産群の世界遺産登録に向けて

帝京大学　経済学部　観光経営学科　大下ゼミ

昨年の９月25日と26日、ユネスコの諮問機関・国際記念物遺跡会議（イコモス）による「富岡製糸場と絹産業遺産群」の現地調査が行われました。６月にも正式発表される世界遺産登録に向けて、地元の期待も高まりを見せる一方で、登録後の集客によって地域の生活やまちづくりに支障が生じないよう、また世界からの注目を地域の活力向上に活かそうとする取組みが佳境を迎えています。今回の観光まちづくり最前線は「世界遺産登録」をテーマにレポートしたいと思います。

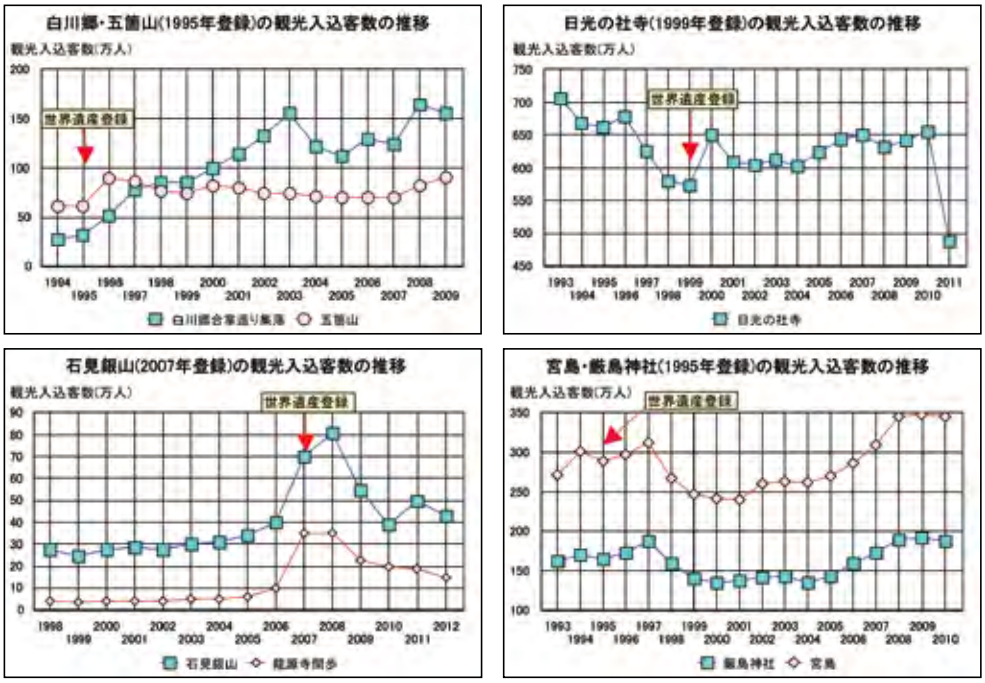
■世界遺産登録後の集客の３つの推移パターン

これまでの我が国の世界遺産登録は17件（文化遺産13件、自然遺産４件）。世界遺産登録地域の登録前後の観光入込数の推移を概観すると、３つのパターンに大別されます。

第１パターンは世界遺産登録が切っ掛けとなって観光客が徐々に増加してくるタイプ。白川郷・五箇山の合掌造り集落（1995年記載）がこれにあたります。合掌造り集落は登録直後に1.5～約２倍へと増加するものの、その後の集客は安定的な増加傾向に向かいます。その変形型が第２のパターンで、先と同様に登録直後は増加するものの、その集客効果は１年程しか持たずに元に戻ってしまっているパターンです。日光の社寺（1999年記載）や石見銀山とその文化的景観（2007年記載）等です。

第３のパターンは厳島神社（1995年記載）に見られるように登録以前より観光客が減少してしまっているタイプです。厳島神社の場合は、台風による被害が観光客の変動に及ぼす影響が少なくはないと推察されます。また近年のNHK大河ドラマの影響もあり観光客が増加傾向に転じてきています。

少なくとも世界遺産登録が契機となり観光客が増加することは共通しています。世界遺産登録に向けて地域が備えておくことでその後の推移は変わってくるのではないでしょうか。何もないと思われては失望して次の来訪や口コミにつながりません。また、一方では極端に俗化させずに自然体の地域でありつづける必要もあります。望ましい観光入込みは、いうまでもなく「白川郷合掌造り集落」の推移パターンではないでしょうか??



資料：世界遺産シリーズ　世界遺産ガイド（日本編）2012改訂版、シンクタンクせとうち総合研究機構

■世界遺産登録への備え～伊勢崎市境島村まちづくり推進協議会女性部会のWSに参加して

イコモス現地調査の直前の９月12日、私たちはゼミ夏季合宿として、担当教授が観光まちづくりのコーディネーターを努めている甘楽町と伊勢崎市境島村のまちづくりWSに参加させていただきました。

境島村には「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産の一つである田島弥平旧宅があります。朝９時過ぎに集合し、まち歩きガイドの案内のもとで地域を拝見。やぐらをもつ特徴的な養蚕農家が数多くある養蚕集落や、町の真ん中を流れる利根川と境島村の歴史、そして渡船での通学の話等に心を奪われました。また近代国家になった

ばかりの頃に蚕種をイタリアに輸出する等、グローバルな取り組みが行われていた地域であったことに驚愕し、その気持ちのままに午後の WS に参加しました。

午後のWSには地元で活躍されている組織の女性の方々が参加され３つのテーブルで意見交換をすることになりました。午前中のまち歩きを通じて「どこが拠点となるか」「どのように巡るのがよいか」を話し合った後に、「地域を訪れた方々にどのようなサービスやもてなしをすれば良いか」について、各自の考えをポストイットに書き出し、取りまとめ、発表という手順で意見の集約を図りました。私たちが参加させていただいたWSは３回目であり、その後もWSを重ねて「まちづくりビジョン(骨子)」を住民の皆さんの意見によって策定されるとのことでした。何故女性の方々だけのWSなのかを大下教授に聞いたところ「男性はお金を使うまちづくり、女性は知恵を使うまちづくり。現実的な意見が得られることが多いから･･･」の言葉に、会議での意見の内容と照らし合わせて考えると、“なるほど”と思う意見が多くあったことを思い出します。

午前中・栗原さんのガイドで地域を見学。
田島弥平旧宅の前で。やぐらと大きな養蚕農家に驚き !!

女性比率の高い WS 会議。
テーブル毎に多くの現実的な意見が集められました。

■さらに広域での連携が「絹産業遺産群」を「日本を代表するクールな絹文化」へと導く

田島弥平旧宅は利根川の南側にあり埼玉県に接しています。明治の大実業家・渋沢栄一翁の深谷市、養蚕研究の競進社のあった本庄市とも近く、一帯は絹産業と関わる多くの物語のある地域です。

また大学キャンパスのある八王子市には「絹の道」と呼ばれる道が残っています。歴史の道・百選(平成８年)にも指定されている道です。安政６(1859)年に横浜港が開港され、輸出品の中心であった生糸が、上州(群馬県)、甲州(山梨県)、信州(長野県)や周辺の山間地域から八王子に集められ、月に６回の市(六斎市)が開かれていたと記録されています。八王子が交通の要衝であったこと、江戸時代から活躍していた鑓水商人の本拠地であったこと等から、生糸取引の拠点となり、八王子から多摩丘陵を超えて町田を通り横浜に人力で運ばれた道が「絹の道」であり、西洋文明を伝える道であったのです。その後、甲武鉄道(現･中央線)や横浜鉄道(現･横浜線)の開通により、人力での生糸の運搬路であった絹の道はその役割を終えることになります。現在、一部に絹の道が残されており、周辺には「絹の道資料館」も整備され、館の展示室内には絹の道や製糸・養蚕に関する資料が展示されています。

群馬県内の「絹産業遺産群」から派生させて、「絹文化」をテーマにして利根川の南部地域や八王子・横浜との連携を図ることは、近代国家建設の激動な時代背景と重なって、よりドラマチックでクールな日本の近代化の物語をアピールできるものへと展開することになるのではないでしょうか。

（文責：原　和哉・芦崎里紗・鶴岡大輝・齋藤和也）

渋沢栄一生家・中の家の内部展示（埼玉県・深谷市）

競進社（埼玉県・本庄市）

八王子は生糸の集積地。八王子から横浜の港へは絹の道を使って人力で運ばれていました（写真左：絹の道資料館 / 写真右：残されている「絹の道」）